

信夫盆地の石碑・石仏に関して

目次

1 経歴

2 調査対象としての石碑・石仏

- (1) 代表的な例……庚申とは
- (2) その他代表的な信仰

3 研究の課題意識と調査方法

- (1) 課題意識
- (2) 調査範囲と調査方法
 - ① グーグルマップ
 - ② 3D 技術の活用
 - ③ 石碑・石仏分布図
 - ④ 福島市内寺社境内等ごと石碑配置図



4 本論

- (1) 「足尾山」石碑について
 - ① 「足尾山」石碑の分布
 - ② 考察Ⅰ……米沢街道板谷峠越と出羽三山信仰との関係
 - ③ 考察Ⅱ……米沢からの物資を無事に福島へ届けることが出来るように祈った説
 - ④ 考察Ⅲ……飛脚問屋と「足尾山」石碑について
- (2) 「雷神」石碑について
 - ① 「雷神」石碑の分布
 - ② 考察Ⅰ……雨乞いの役割
 - ③ 考察Ⅱ……晴れ乞いの役割
 - ④ 総合的考察……幕政下の飢饉と重税
- (3) 今後の課題

5 岡部・岡島・山口の石碑石仏について

- (1) 特徴
- (2) 庚申について
- (3) 渡部一磨おすすめの石碑石仏

6 お願い



1 経歴

2007年6月20日……福島県福島市生まれ

めばえ幼稚園入学・卒業

福島大学附属小学校入学・卒業

→歴史に興味を持つ

福島大学附属中学校入学・卒業

→ソフトテニス部

→仏像に興味を持つ

福島県立福島高校入学

→JAZZ研究部・ツチノコ研究会 etc

→高校一年生秋……福島市飯坂八幡神社の男根道祖神と出会う

→高校二年生春……学校新聞に掲載・守谷早苗先生と出会う

→高校三年生夏……いままで一番石碑石仏を巡る

→高校三年生秋……筑波大学文化・人文学群人文学類にAC入試で合格する



福島市飯坂八幡神社の男根道祖神

2 調査対象としての石碑・石仏

→江戸時代を中心に流行した、民間信仰に関連して建立されたもの

→歌碑・忠魂碑などは含まない

(1)代表的な例……庚申信仰とは

(2)その他代表的な信仰



福島市上鳥渡観音寺の
(梵字)二十三夜塔



福島市宮代天神宮の
巳待塔



福島市信夫山の
出羽三山石碑

3 研究の出発点と調査方法

(1)課題意識

石碑をグーグルマップにマッピングする

→石碑石仏の分布に地域差があることが分かってきた

→信夫盆地にすら、民間信仰に性格があるのでは??

→先行研究発見できなかった

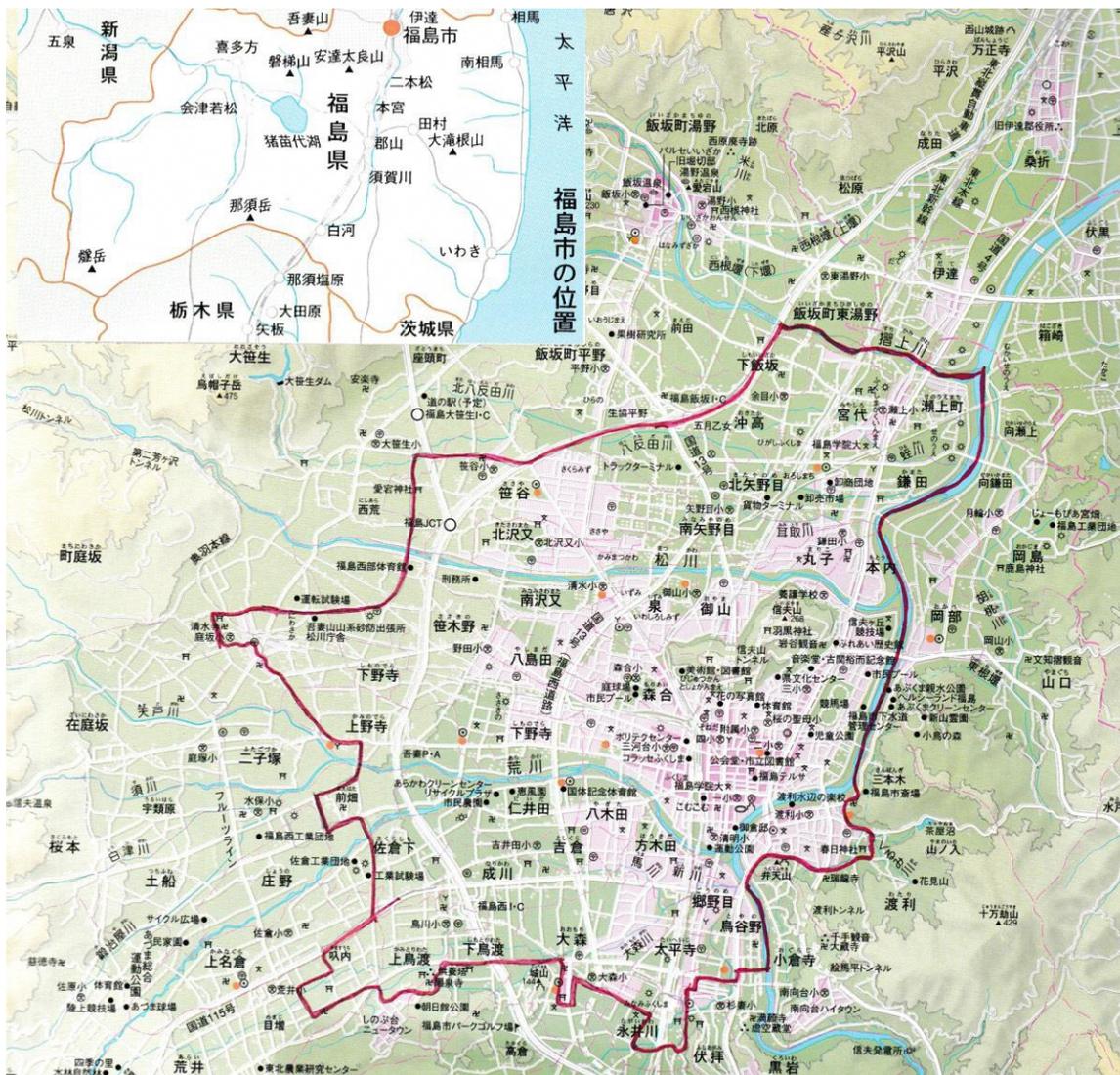
→似たような研究をしている人はいたが、悉皆調査は行っていない

自分の足で石碑を巡る必要がでてきた！！

(2)調査範囲と調査方法

→車の免許を持っていないため、ママチャリによる調査

→信夫盆地の中で範囲を決める



→合計2397基になる(大学提出時点)

→調査方法も決める

①グーグルマップでのマッピング

→碑銘に注目して、48種類にわけ

庚申塔 釜神 馬頭観音 巳待 南無阿弥陀仏と念仏 足尾山 大神宮 巡礼系 道標 ○○神 経典系 道祖神 出羽三山 古峰 ○○山 ○○神社・○○宮 弁才天 石尊系 三界萬霊 金毘羅と象頭山 金剛山 ○○権現 牛王尊 月待 山神 雷神 妙見 山津見 大黒天 若木系 秋葉系 東堂山 金華山 養蚕 不動明王 水神 青麻 天神 聖徳太子 荒神 水天宮 牛頭天王 猫神 その他

②3Dの利用

→拓本はかさばる



③石碑石仏分布表の作成

→2497基の石碑をまとめる



マッピング	2025.5.15
地域名(大字など)	下野寺
場所	日枝神社
表記	金毘羅大権現
年号	天保十五年
形	自然石
備考	×

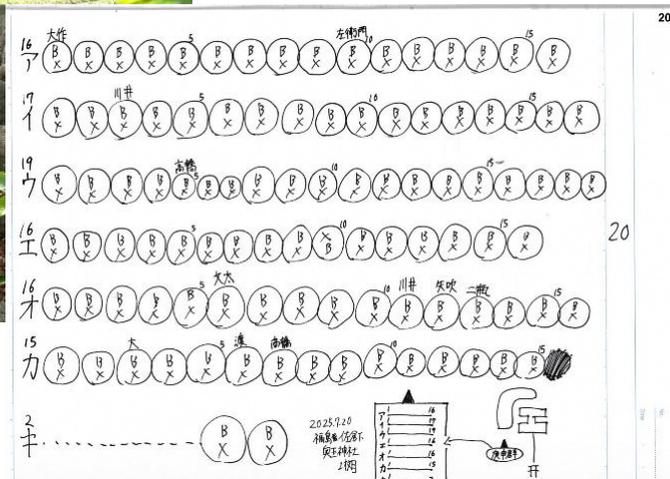
※分布表作成の上での注意点
碑銘を忠実に記録する(金毘羅・金比羅、弁才天・辯戔天など)

④福島市内寺社境内等ごとの配置図の作成

→よりミクロな目線で記録する

→根気よく記録

→挿絵も書く



研究こぼれ話① 女性を鷲掴みにする青面金剛！？

福島市上野寺に大林寺という古刹がある。その古刹には、参道左の駐車場に、摩耗の激しい青面金剛がある。邪鬼を踏み、憤怒の顔でにらみつけるその姿は、一見普通の青面金剛だが、彼の下左手(左手は三本ある)を見ると、なんと、女性の髪を鷲掴みにしている。この姿態をとる青面金剛は、調査範囲内ではここだけであり(渡部一磨調べ)、非常に珍しいものである。

じつはこの女性、人間ではない。女性の正体は「ショケラ」と呼ばれるもので、ショケラは庚申信仰に登場する「三尸」のことという説があるが、ショケラと庚申信仰がなぜ結びついたのでかは不明な点が多く、謎が多い。一説には「尸」の漢字は元々、シャクムシの事を指すため、そのシャクムシが訛って、「ショケラ」になったという眉唾説もある。

さらに、なぜショケラが女性の姿で表現されているのかも不明な点が多い。ある説には、庚申信仰を厚くするように諭しているというものもあるが、これに反して、庚申の夜は男女の交わりを嫌うことから、女性を誘拐したという説もある。

今後、大林寺の青面金剛を訪れる機会があれば、ぜひ、ショケラに check it out !! していただきたい。

4 研究本論

(1)足尾山について

→茨城県の筑波山と加波山との間にある山で、江戸時代の民衆はこの山から勧請して、健脚や旅の安全を祈った。

→詳しい信仰については、明治の火災で烏有に帰してしまい、分からない。

→福島市史には数行のみ記載あり。

①「足尾山」石碑の分布



マッピング	相類名(大字など)	場所	表記	年号	形態	備考
2025.1.13	番木野	大山神社	足尾山	文久二年	自然石	
2025.7.25		鎌久保路傍		明治七年		
2025.5.15		大原神社		慶應四年		
2025.5.16	八島田	本庄八幡神社	足尾山	無年記	自然石	
2025.1.6	南沢又	加茂神社	安政七年			
2025.1.19	上野寺	西原邊傍	天保			
2025.7.25	下野寺	杉ノ下路傍	足尾山	了庵	不明	
2025.3.18		新道堂		寛政二年		
2025.1.7	下野寺	春日神社	足尾山	弘化四年	不明	
2025.5.15		東御堂(私布神)		私布地のため調査不詳		
2025.1.13	北沢又	日枝神社	足尾山	明治	自然石	
2025.4.27		鹿野神社		昭和六十三年		
2025.1.19		大和田庵		嘉永六年		
2025.1.13		地蔵堂跡		明治八年		
2025.4.29	菅谷	大原神社	(梵字)足尾山	嘉永元年	自然石	
2025.4.27		前田熊野神社		嘉永		
2025.1.19		寺町熊野神社		弘化		
2025.4.27		金吾屋神社		天保		
2025.4.27	山神神社	安政四年	足尾山	? ? 九年 秋		
2025.4.27	平野	大原神社				慶長
2025.4.27	山本	貴船神社	足尾山	産社		

70

マッピング	相類名	場所	表記	年号	形態	備考	
2025.4.28	彌上	大寛神社	足尾大神	明治三十年			
		貴船神社		昭和六年 荒町議中			
	宮代	日枝神社	足尾山	昭和四年 庵管一岡			
		長林路傍		明治			
2025.5.5	庭坂	寛神社	足尾山	明治三十二年	板碑型	佐藤家	
		櫻本寺		寛政不可			
		寛井		弘化四年			
2025.4.25	佐倉下	奥玉神社	足尾神社	昭和四年	自然石		
		三島神社		明治二十七年			
2025.1.19	横川	三島神社	足尾山	安政五年	自然石	武藤長久	
2025.5.1		大森		前田八幡神社			昭和十年
2025.3.9		水引川		神保町路傍			嘉永六年
2025.1.4		方木田		道徳神社			嘉永七年
2025.5.1		蓮利		天神神社			無年記
2025.4.24		徳天山		羽黒神社			昭和十三年
2025.4.26	飯坂	八幡神社	足尾山	慶應三年	自然石		
合計						43	

なぜ「足尾山」石碑は西側に多いのか

②考察 I 米沢街道板谷峠越と出羽三山信仰との関係

米沢街道板谷峠越とは

→福島～庭坂～米沢へつながる街道(栗子峠とは違う)

→道中に難所、板谷峠がある

→板谷宿には旅人を介護するために本助小屋・新助小屋がおかれていた



板谷峠はどのくらい危険なのか

古川古松軒(1726～1807年)『東遊雑記』

奥州福島を出でて悉く山路なり、中にも板谷街道というのは三里の嶮道にて、一人横たわれれば万人をとどむるというべき難所なり。南方は会津より越ゆるなり。(中略)その嶮岨筆紙に尽くすべからず。峯に登れば蒼天に入るかと驚き、谷に降りては金輪際(きんりんざい)に落つるかと思ふ。

下線部を訳すと……

この峠(板谷峠)の道が険しいのは文章では表すことができないくらいだ。山の高いところ
上ると天に届くようだと言き、谷に降りると底の底まで落ちるのだろうかと言れる

出羽三山信仰とはなにか

→山形県にある月山・湯殿山・羽黒山の
総称(時代によって組み合わせは異なる)

→江戸時代には民間信仰の対象となり、
修験者ではない一般信者の集団が各地
にできて、出羽三山信仰が盛んになっ
た。



「足尾山」石碑の分布+米沢街道板谷峠越のルート
「出羽三山」石碑の分布を重ねて見よう



③考察Ⅱ 米沢からの物資を無事に福島へ届けることが出来るように祈った説

→米沢街道板谷峠越は危険な道のため、基本東北諸藩は通らない。(参勤交代などの際には羽州街道を通る)

→ただし、米沢藩は江戸に物資を運ぶために阿武隈川の水運を利用する必要があり、米沢藩とその商人は利用していた。

→主な移出品……………米・青苧

→主な移入品……………茶・塩

→しかし、米沢の人々が信夫盆地に石碑を建立するのは現実的ではない

→米沢の物資を運んだ信夫盆地の人々が、建立したのではないか

→「助郷」を理解する必要があるのでは??

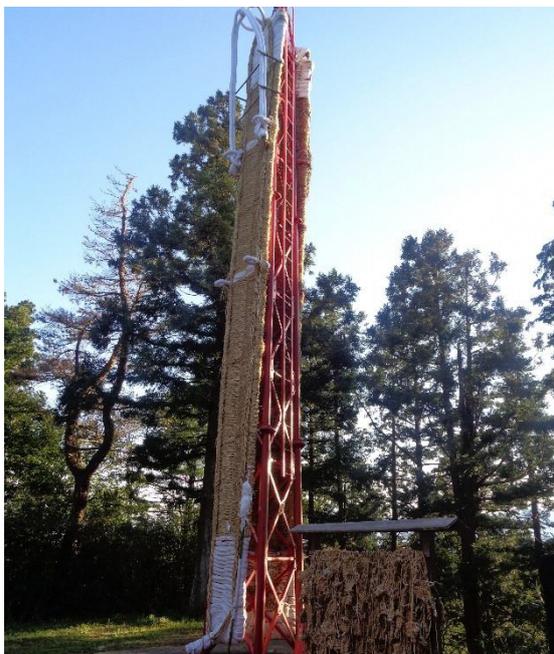
福島市史近世Ⅰ(昭和四十七年)

「農民に強制的に人と馬の割り当てを行ない労役を付加したもので、荷物と米・材木などあらゆる運輸労働にわたり、すべて農民をして行われていたものである。

(中略)しかしこの助郷にはさらに二種類あり、大名の大小により問屋に常備された陣馬では不足を来したときは、「定助郷」と称して、その宿の付近の村々から前もって割り当てておいた人馬を動員した。」

④考察Ⅲ 飛脚問屋と「足尾山」石碑について

信夫山羽黒神社の足尾神社と、その参道に奉納されている飛脚問屋嶋屋の灯籠



福島市信夫山の羽黒神社
大わらじとわらじ



福島市信夫山の羽黒神社
足尾神社



福島市信夫山の羽黒神社

飛脚問屋嶋屋奉納の灯籠(左から灯籠・嶋屋碑銘・文化八年碑銘)

飛躍問屋嶋屋とは

→嶋屋は上野の四か所と奥羽の福島、仙台、山形に出店を設置するなど事業を拡大していき、その輸送網は幕末に相当発達した。

→福島での出店は延享二年(1745年)町飛脚上州屋が「福島三万石一揆」で打ちこわしに追い放されると、翌三年山田屋長尾兵左衛門がこれに代わり、この山田屋に対して、嶋屋が物心両面からこれに参画し、チェーン的結合関係、いわゆる嶋屋組仲間を形成した嶋屋の本店は江戸日本橋通り瀬戸物町にあったが、支店は福島市の本町にあった。

→そして毎月五のつく日に、書状や荷物を江戸表に往復して運んだ。福島藩の藩主や藩士などもこの嶋屋を利用し、藩主が使う場合は無賃であった。

大わらじ奉納とは

『福島市史 近世Ⅱ』

「大わらじは、普通、仁王門に奉納する習(ならわし)は各地にある。信夫山も、神社境内の入口にあった仁王門に奉納したのがはじまりとされる。

明治維新の廃仏毀釈令によって、仁王門がとりこわされたので、羽黒山の氏子であった画家の西坂梅屑が下野国足尾山から遷宮した足尾山神社が羽黒宮の西側に道祖神と並んであり、仁王門撤去後はこの足尾神社に奉納することになった。

大わらじ奉納は福島嶋屋・京屋・千切屋などの飛脚問屋や、農村の若者組の手で行われた。」

西坂梅屑とは

『福島市史 近世Ⅱ』

「信夫山の西坂樗山は、梅元斎の弟子で、はじめ梅屑と号し、俳人で心学者の西坂珠屑の子で、幼名繁吉、吉左衛門といい、御山村組頭を勤め、信達の村絵図を描く。花鳥を専らにし、師梅元の技を次いで鷹がきの名手といわれ、明治二十年四月(1887年)七十歳で歿した。羽黒

神社本殿内陣の天井絵その他の代表作がある。」

『福島の民俗 I 「福島市史」別巻Ⅲ』

「(小倉寺が境内の「足尾山」に大わらじを奉納することを踏まえて)足尾山に大わらじを奉納するのは、安政年間勧請した信夫山羽黒権現境内にある足尾山への大わらじ奉納の影響であろう。」

「明治維新後の神仏分離令から仁王門は撤去されて福島真浄院に移った後、たまたま安政年間画師西坂椋山が伊勢参宮の途勧請した足尾神社の石宮が境内にあって、旅の安全・健脚を願う者が実用のわらじ・鉄製のわらじ・足形石が数多く奉納されていたので、仁王門を失った後はこの足尾社の周囲にある大木に奉納された。各村々や福島町の間屋・飛脚・運送業者が大きさを競って奉納するようになったのは、古老の記憶によると日清・日露戦争からで……………」

上記の記述を基に推理すると……

→これら三つの記述によると、羽黒神社にある足尾社は安政年間(1855～1860年)に勧請されていることが分かる。

→西坂椋山はこの足尾社を勧請した西坂梅屑が38～43歳のころだということが分かる。そしてこの嶋屋の灯籠が奉納されたのは文政八年(1824年)のため、足尾社ができる31～36年前だということが分かる

→さらにこの記述では、最後に「長途の旅に出るものが藁わらじや金わらじを奉納して旅の安全を祈る習慣は、大わらじ奉納とは別に行われていたものである。」とあることから、私は嶋屋が灯籠を羽黒神社に奉納したのは、「足尾山」に対してではないと考える。

研究こぼれ話② 伏拝の嶋屋奉納の「馬頭観音」石碑

私はある日、羽山岳の太子堂での石碑調査を行った。太子堂での調査も終わり、参道を下っていると、参道入口に、私の背丈ほどの「馬頭観世音」石碑が一基あった。正面碑文周辺は、大きく縁取りがされていて、私が石碑の形を分類するために使用した、*近世庚申塔類型概念図(石神裕之 近世庚申塔にみる流行型式の普及)2002年より*によると、いわゆる、「板碑型」と呼ばれる石碑形態であることが分かった。

この石碑を矯めつ眇めつしていると、正面右横に、「嶋屋奉納」と彫られていることに気が付いた。嶋屋と言え、信夫山羽黒神社に灯籠を奉納した、飛躍問屋の嶋屋のことであり、その灯籠と目の前の「馬頭観世音」石碑とが関連しているのか疑問に感じた。たしかに伏拝は、福島宿と松川宿を結ぶ奥州街道の咽喉にあたる場所で、交通輸送においては、非常に重要な場所だったのかもしれない。ちなみに建立年はいつ頃なのだろう。正面左を覗いてみると、「文化二年」とある。灯籠奉納(文化八年)の六年前である。

もしかしたら、文化年間に奉納していることに、なにかしらの関連があるのかもしれない。